

◆Ⅲ章 授業に生きる個別の指導計画◆

1 「個別の指導計画」の作成

(1)「個別の指導計画」作成の意義

① 個別の指導計画作成が、子どもの教育的ニーズに応じた教育課程の編成につながる。

今回の学習指導要領改訂の主な事項のひとつとして、障害の重度・重複化、多様化に対応した、一人一人に応じた指導の一層の充実が求められている。

子ども主体の生活を実現するに当たり、子どもの思いや願いを受け止めながら、その子の日常生活の姿や能力、適正、興味関心、性格、進路なども含めて、ありのままに子どもをとらえ、学習内容を選択・組織していくことが大切である。個別の指導計画を作成・実施・見返し・修正していくことが、子どもを主体にした子どもの教育的ニーズに応じた教育課程の編成につながる。

② 教師間の共通理解に立った指導により長期的、継続的指導につながる。

幼児児童生徒一人一人の指導は、一貫性のある指導体制の下に、長期的・継続的に行われなければならない。担当教師が替わることによって、停滞したり後退したりすることはあってはならない。

そのため特別支援教育において、学校全体、全職員で障害のある幼児児童生徒を指導していくに当たり、教師間で共通理解を図った上で指導に当たることが大切になる。そこで、個別の指導計画を作成する過程で、「子どものどのような姿をとらえ、どう理解するか」「教育課題は何で、どのような手だてを用意するのか」等、子ども理解を深め、その子に応じた教育内容や方法を検討し、共通理解の上で長期的、継続的指導に心がけていきたい。

③ 家庭との共通理解や学校の説明責任を果たすことにつながる。

個別の指導計画作成に当たっては、子どもの姿について家庭と情報交換を行い、伸びてきているところや長所、できるための条件等、いわゆる「可能性の芽」について共通理解をして、教育課題や指導の方向等が設定される。また、その学習内容にかかわる評価について保護者に伝え共通理解し、今後の学習の方向等について探っていく。

このようなプロセスの中で、教師の意図するところや学習のねらい、その子の育ちについて、保護者と共通理解を図ることは、同時に説明責任を果たすことにもつながっていく。家庭との共通理解を図ったり説明責任を果たしたりすることは、ともに子どもの育ちを支える点から大切なことである。

(2)「個別の指導計画」作成の対象

県内の学校では、これまでも特別支援学校や特別支援学級において、障害や発達段階が様々な児童生徒に対して、より効果的な指導をする必要から、個別の指導計画を作成してきた。

今回改訂された学習指導要領では、幼稚園教育要領や小・中・高等学校学習指導要領の第1章総則の中で、障害のある幼児児童生徒などについては、指導・支援のための計画を個別に作成し、指導内容や指導方法の工夫を計画的・組織的に行うことが例示された。

そのため、従前の特別支援学校・特別支援学級の幼児児童生徒に加え、通常の学級に在籍

する特別な支援を必要とする障害のある児童生徒なども含めて、個別の指導計画の作成を推進する。

(3)「個別の指導計画」作成の立場

個別の教育支援計画との関連を図りながら、個別の指導計画を作成することが大切である。個別の指導計画は、まず、幼児児童生徒一人一人を肯定的・共感的に理解しながら、その子の「可能性の芽」を導き出し、全人的な発達を目指して支援に生かすようにすることを大切にしている。さらに、その可能性の芽や願いから教育課題を設定し、各教科等(教科別・領域別)の指導内容を選択・組織するとともに、年間指導計画の作成をして日々の指導に生かすようにしてきた。

これは、個別の指導計画を作成するということにとどまらず、子どもを肯定的・共感的にとらえて支援に生かすことで、子どもが興味や意欲を持って、自立的・主体的に学習や活動に取り組み、成就感を味わうとともに、自己を肯定的にとらえることができることを願っているためである。そこで指導にあたっては、「できる・できない姿に限定せず、周りの状況や条件との兼ね合いから、その子の思いを含めて捉えていく視点に立って、「可能性の芽」を大切に考えてきた経緯がある。

また、今回の学習指導要領の改訂により、個別の指導計画を作成する対象が、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする障害のある児童生徒などにまで広がった。同様に個別の指導計画を作成する中で、その子のよさや特性、思い等の理解を深めて支援していきたい。

コラム 「可能性の芽」を把握するポイント

- ・ 生育歴等や日常生活の姿にあるその子の行動の意味や思いを理解して、これから伸ばしていきたいことを記入する。
- ・ そのために、主体的な行動や自分から取り組む姿、自ら活動を変化させる姿、興味関心等を分析し、よりよく生きたいとするその子のよさを把握して、記入する。
- ・ その子の可能性については、「今このような条件の下で、ここまでできるようになっている」というとらえ方をしていく。その条件をどの程度広げたり緩めたりできそうなのかという点で、教育課題や指導の方向につなげていく。

(4)「個別の指導計画」とは

従来の教育課程編成の手引きでは、幼児児童生徒の全人的な発達を目指した教育実践を目指し、幼児児童生徒一人一人の全体像の把握を基に設定した「教育課題個人表(A)」「指導内容の選択・組織(B)」「年間指導計画(C)」を個別の指導計画とし、自立活動における指導の目標や具体的指導内容を含めて作成してきた。

今回の学習指導要領の改訂により、特別支援学校及び特別支援学級においては、個別の指導計画は「教育課題個人表(A)」「指導内容の選択・組織(B)」「年間指導計画(C)」の3つをセットに作成することを基本とし、自立活動を含めて作成する。

また、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする障害のある児童生徒にかかわる個別の指導計画は、「教育課題個人表(A)」「指導計画表(D)」を基本に作成するようにしたい。

(5) 作成・活用の配慮点

① 保護者・関係機関との連携を

特別支援教育は、自立する力を育てることがその目標である。このことは、その子がよりよく生きていく力、まさに「生きる力」を育てていくことでもある。その意味で、保護者の期待は大きい。保護者の考えをよく聞き、学校としての考えを伝えながら、やり取りする中で、共通理解を図り、保護者との信頼関係を基盤にして指導を進めていきたい。

また、関係機関と連携を図りながら、一人の子どもにかかわる者がその立場を生かして指導を進めていくことが必要である。

② PDCA サイクルで

個別の指導計画は、作成し、日々の学習活動に活用していくことに意義がある。PDCA サイクルは、子どもの実態把握から、個別の指導計画を作成する（Plan）→計画に沿って、実践する（Do）→実施した内容を点検・評価をし、学習活動や指導内容、教育課題個人表について振り返りをする（Check）→検証を踏まえて、さらなる手だてを講じていく（Action）、というように行う。個別の指導計画を修正・加筆しながら活用していくことで、さらにその子の主体的な姿を見い出すことが大切である。

2 「個別の指導計画」の形式例

(1)「教育課題個人表(A)」

① 形式例

生育歴・諸検査・連携の記録など

生育歴：就学前、家庭や保育園等でどのように育ってきたかについて可能な限り記入する。

家庭環境：その子の育ちに影響を及ぼしていると思われることについて記入する。

諸検査：単に結果の数値だけではなく、そこから読みとれるものを記入する。あくまでその子の一面として把握する。

医学的所見：その子の障害の状況や程度等を記入するが、障害名で固定的な見方をしないように配慮する。医師の所見等で日常留意しなければならないことがあれば記入する。

専門機関等との連携

日常生活の姿

- 「目当て・見通し」「自己決定」「基本的な生活習慣」等、児童生徒の実態によせた観点を意識しながら、その子にとって特徴的と思われる観点到重点をかけて記入する。
- 単に「する」「しない」という行動のみを記入するのではなく、その時の状況や条件を併せて記入する。
- 否定的・マイナス的にとらえるのではなく、できる限り肯定的・共感的にとらえるようにする。
- 可能性の芽につながるようなものについては、その子の行動や姿の裏付けになりそうなものを視点にして記入する。

☆ 自立活動の6つの内容の区分、26の項目を視点も意識しながら実態把握して記述する。

可能性の芽

- よいところ、得意なこと、伸びてきているところなどのプラス面を記入する。
- こうすれば…できる、このような条件でできるという、できるための条件や状況、必要な支援情報を記入する。

願 望

- 本人と保護者や教師の思いや願いを記入する。本人から聞くことができない場合には、予測して記入してもよい。
- 卒業後の姿については、単なる予想的なことではなく、教師の願い、保護者の願いを踏まえて、どのような社会的自立の姿を目指しているか記入する。

教育課題

- 将来の自立に向けて、本質的な観点到立って今伸ばしていきたい面を、可能性の芽を踏まえながらおよそ1年後を展望した課題を設定する。
- 幼児児童生徒が意欲的にかかわる視点をもって教育課題を設定する。

☆ 自立活動については、以下のように、該当する6区分、26項目を2つ以上が分かるように記述する。
[人間関係の形成(3)][情緒の安定(1)]

指導の方向

- 教育課題を踏まえて、指導・支援の方向性を具体的に記述する。その際、可能性の芽に記されている、できるための条件を生かしながら、具体的な場面や指導・支援の方法等について記入する。
- その子が、自分の力で達成していけるために、自主的・自立的な学習となるために、「できる状況づくり」を大切に考え指導の方向を導き出す。

② 記入例「教育課題 個人表(A)」

6 年 女 リカ (仮名)

生育歴・諸検査・連携の記録など

- ・ 熟産・普通分娩
- ・ 両親・弟・祖父母の6人暮らし
- ・ 保健師が開催する教室，A病院にて個別療育。
- ・ 今は障害者支援センターのグループワークに参加。
- ・ 広汎性発達障害(〇〇病院)
- ・ 左耳はほとんど聞こえない。
- ・ WISC-Ⅲ(検査日・検査機関)
VIQ 〇 PIQ 〇 FIQ 〇
(VC 〇 PO 〇 FD 〇 PS 〇)
- ・ 視覚優位。言語概念に偏りがみられる。
- ・ 学期に1回程度，保護者・担任・コーディネーター・障害者支援センター等で支援会議を実施。

日常生活の姿

- ・ 全校の前で，得意なダンスやピアノ，歌などを堂々と披露する。
- ・ 忘れ物をすると学級担任に言えずに泣いているが，A先生が聞く伝える。
- ・ 集団での挨拶場面では，耳を押さえて場を離れるが，音量が小さいと，場に戻るまでの時間が短い。
- ・ 高学年になって孤立傾向にあるが，調理実習で手順や分担を示しておく，流れに添って友達と自分の役割を行う。
- ・ 図工の制作では，絵や図などで工程を細かく具体的に示しておく，自分で作業を進めることができる。
- ・ 活動の前に，「これをやります」「次にこれをやります」等と確認しておく，スムーズに取組める。
- ・ 作文や感想記入では手が止まってしまうが，漢字の読み書きや計算など正答率が高く，平均以上。

可能性の芽

- ・ やり方や手順などが分かりやすい視覚的支援で見通しがもてると，安心して自ら取り組みそうである。
- ・ 取り組み方等の具体的で端的な指示は，意味を理解することができる。
- ・ 聴覚認知の偏りで困っているようである。苦手な音質や音量を調節すると，安心できそうだ。
- ・ 例示されたり決められたりした活動や学習の中では，友達とかかわりやすい。
- ・ A先生のように信頼関係ができている人を仲立ちにして周りとのコミュニケーションを広げていけそうである。

願 い

- 【本人の願い】・音楽を頑張りたい。
- 【担任の願い】
- ・ その場に応じて自分の気持ちを伝えられるようになってほしい。
 - ・ 集団の場に安心していられるようになってほしい。
- 【保護者の願い】
- ・ 困っていることを伝えられるようになってほしい。
 - ・ 高校に進学できる学力を身に付けてほしい。
 - ・ 仲のよい友人を増やしてほしい。
 - ・ 本人の障害にかかわる理解を学校で進めてほしい。
- 【将来の姿】
- ・ 地元の中学・高校へ進学。将来は，仲間と音楽を楽しみながら働きたい。

教育課題

- 集団の授業場面や活動場面であることができる。
 - 各授業や集団活動の場面で自ら取り組む姿が多くなる。
- ☆安心して，困ったことや要求を自分から伝える相手を広げる。(心理的な安定(1)人間関係の形成(1)環境の把握(2))

指導の方向

- ・ 視覚支援を整え，本人が自信を持って取り組める活動に取り組むようにして見守り，自ら取り組む姿を認める。
- ・ 興味関心を踏まえ，A先生が仲立ちしながら，かかわり方が分かりやすく見通しが持ちやすい活動に取り組むようにする。
- ・ 対人関係ゲーム等を朝の時間や休み時間に取り入れ，様子を見ながら取り組むようにする(学級担任)。
- ・ 小集団の安心出来る仲間とSSTや楽しめそうな活動に取り組むようにする。学級担任等と支援情報を共通理解しておく(自・情学級担任)。
- ・ 耳鼻科医や保護者に相談をして聴覚に対する実態をつかむ。また，歌やダンスなどの好きな場面で集団の大きさや音量の実態に配慮しながら一緒に行うようにし，イアマフの利用なども工夫する。
- ・ 学級の道徳や人権教育の学習で，本人の自己理解が進み，自己肯定感が高まるような学習を組む。

(2) 指導内容の選択・組織(B)の形式(例)

① 各教科等の指導内容の選択(B) (知的障害特別支援学校 中学部)

各教科等	指 導 内 容
国 語	(例) 具体項目に合わせて記述 ・やさしい物語や詩などを読んで楽しむ。〈中14〉
社 会	
数 学	- 学習指導要領に示されている各教科の内容を基に、その子の障害の状態や発達の状況を踏まえ、教科ごとに指導内容を選択する。そして、取り扱いの順序や重点のかけ方等を加味して、具体的・項目的に記入する。 - 知的障害特別支援学校においては、本編 P.89 V章資料編(1) 知的障害特別支援学校 各教科目標及び内容・具体的内容を参考に、上記の国語のように記入したい(文末に〈 〉で項目の番号を示す)。
理 科	
音 楽	
美 術	
保健体育	
職業・家庭	
(外国語)	
(その他 特に必要な教科)	
道 徳	
特別活動	
自立活動	自立活動の指導内容については、自立活動の内容の6区分、26項目の中から、必要とする事項を選定する(特別支援学校編 P.115 VIII章自立活動についてを参照)。
総合的な学習の時間	総合的な学習の時間は、活動内容が分かるように記入する。

② 指導形態別指導内容の組織 (B)

指導の形態	指導場面	具体的指導内容	評価
各教科等を 合わせた 指導	日常生活 の指導	・日記を提出し、今日の予定を確認する。(登校時) ・カードで自分の分担を確認して、掃除をする。(清掃) ・一日の活動を振り返り、文例を見ながら感想を発表する。(帰りの会)	
	生活単元学習	・日課表の時間割にかかわる指導場面と指導内容を具体的に記入する。 ・ここでは、各教科等を合わせた指導の代表的な指導の形態である「日常生活の指導」「生活単元学習」「作業学習」「遊びの指導」を指導場面として挙げた。なお、それぞれについては特別支援学校編、小学校・中学校編を参照。	
	作業学習		
	遊びの指導		
各教科等の 指導	自立活動	・手順表を見ながら友だちと調理活動等に取り組む。 [情緒の安定(1)(2)] ・通常の学級の少人数グループで、音楽やダンスを楽しむ。[人間関係の形成(1)情緒の安定(1)]	
	道 徳		
	特別活動		
	総合的な 学習の時間	・総合的な学習の時間は、目標や指導内容は示されていないので、活動内容を記入する。	
	教科別の指導	・教科別の指導(音楽・体育など)を実施する場合、指導内容や指導の場を記述する。	

(3)「年間指導計画(C)」の形式(案) 小学校特別支援学級の例

行事	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	入学式		音楽会		水泳記録会	運動会		なかよし旬間	学習発表会	スキー教室		卒業式
生活単元学習	春探しをしよう 「ニラせんべいやさんをオープンしよう」 新入生を迎えよう 野外調理をしよう 学習発表会の準備をしよう ジャガイモ料理を作ろう そり遊びをしよう お別れ会を開こう											
自立活動												
・・・												
・・・												
国語												
算数												
・・・												
道徳												
総合的な学習の時間												

- 行事の欄には、学校や学級単位で行う行事等を項目的に記入する。
- 年間指導計画は概略を示し、計画の詳細については必要に応じて単元等の指導計画で作成する。
- 教科等を合わせた指導をしている場合には、指導形態ごとの名称を記入する。教科別の指導をしている場合には、教科名を記入する。
- 自立活動については、自立活動の区分と項目が分かるように[]等で示す。

(4) 通常の学級用 指導計画表(D) (短期)

年 組 氏名		作成者：		(年 月～ 月)
		ねらい	支 援 方 法	評 価
日常生活		- 教育課題との関連をできるだけ意識しながら、取り組みやすそうなことに絞って記入。 1か月後くらいの姿を目安にねらいを設定する。	- 場面，時間を設定し，日常的に繰り返し指導できる具体的内容を記入する。 「だれが」「どこで」ということを含めて，記入する。 - 可能性の芽との関連を図りながら，その子ができるための条件や状況を盛り込み記入する。	- 変容の姿や成果の有無を端的に記入する。 - 計画立案して，およそ1か月後に記入する。 - 支援の方法を継続するか修正するか検討し，次の計画に生かす。
行 動				
対人関係・コミュニケーション				
教科等	国語			
	算数			
	その他			

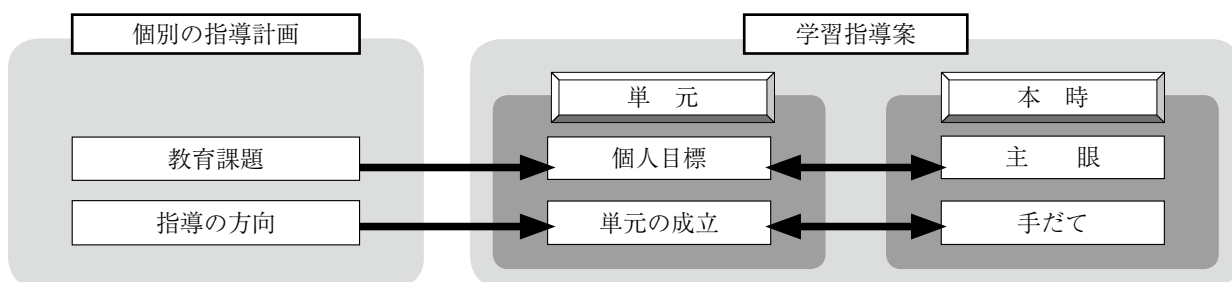
3 学習指導案の作成

(1) 個別の指導計画と学習指導案

個別の指導計画は、計画の立案に意味があるわけではなく、個別の指導計画の中にある「教育課題」や「指導の方向」を意識しながら日々の生活づくりを進めることが大切である。

個別の指導計画の中にある「教育課題」や「指導の方向」は、学習指導案の中でさらに具体化される必要がある。「教育課題」については、単元の個人目標や本時における主眼との関連を図るようにする。また、「指導の方向」については、単元の成立に反映したり、本時の手だてに生かしたりするようにする。

いずれにしても、個別の指導計画は、幼児児童生徒の生活全般とつなげて、意識しながら支援に生かす必要がある。



(2) 学習指導案の作成

① 学習指導案作成の手順と作成上の留意点

1 単元(題材)名

単元名

生活単元学習、作業学習など
(一定期間・一定の課題意識や目的意識をもって取り組む学習活動)

題材名

教科学習、日常生活の指導など
(繰り返し実施したり、短期間に一つの学習内容を展開したりする場合)

生活単元学習や作業単元学習のように、一定期間、一定の課題意識・目的意識をもって取り組む学習活動の場合は、「単元名」とし、日常生活の指導や教科学習などのように、繰り返し行ったり短期間に一つの学習内容を展開したりする場合には、「題材名」とすることが多い。単元名・題材名の言い表し方は、一般的には、学習活動、学習内容、或いは教材そのものであったりするが、幼児児童生徒が学習意欲や期待を高め、幼児児童生徒の学習の目当てや学習のテーマが端的に示されるような言葉で表したい。

2 単元の成立(単元のよさ)

- ・単元の成立、単元のよさ
(「活動のきっかけ→醸成→単元として組織」)
- ・幼児児童生徒の実態
- ・教師から見た教育的意義
- ・幼児児童生徒にとっての必然性

- ・教師から見た教育的意義
- ・幼児児童生徒にとっての必然性
- ・興味関心
- ・幼児児童生徒の実態
- ・ねらい
- ・地域性

この単元活動を通して予想される教育的意義を明確にし、幼児児童生徒にとってどのような必然的な理由によって単元を設定するかを明らかにする。

一般的には、社会の要求、学校教育目標、幼児児童生徒の実態、学習素材や教材に対する興味関心、単元のねらい、学習内容、方法などを関連的に考察し、できるだけ簡潔に記述する。

生活単元学習の場合は、その活動がどのようにして芽生え、醸成され、単元として組織されるようになったかなどの成立の過程がより重要なため、「単元の成立・単元のよさ」と角度づけて言うこともある。この場合、幼児児童生徒の生活をどのように組織し、学習活動として意味付けたかを、幼児児童生徒の具体的な姿で表現したい。ここでは、「学習のきっかけ→興味関心の広がり→意欲の高まり」などの活動の要素で、幼児児童生徒にとっての学習の必然性を示したい。

幼児児童生徒の生活の中のどの活動に目を付けたか、そして、その活動がどのように広がり、集団としての目標意識が芽生え、活動意欲が高まっていったかを示すのである。さらに、これらの活動を教師が教育的な立場でどう見届け、どのような価値付けかも加えておくことが必要である。

3 目 標

- ・学習集団としての総括的、全体的目標
- ・個々の幼児児童生徒の教育課題に向けた具体的目標（個別の指導計画との関連を図る）

ここでは、学校教育目標を踏まえ、幼児児童生徒の現在の実態に合わせて何を生かしていくか、その単元のもっているよさを幼児児童生徒が学びとれるようにするにはどうするか、ということを総括的に把握し示す。

また、個々の具体的目標については、総括的・全体的目標を意識するとともに、教育課題との関連を図りながら、単元の目標を定めていく。

4 展開の概要

導 入	テーマ 目当ての確認	時間数
展 開	実際の活動	時間数
まとめ	目当ての実行 反省・次の目当て	時間数

学習の
流れ↓
学習の
段階↓

目標の達成を目指し、幼児児童生徒の側に立って学習活動を展開するときに押さえないければならない主な学習を段階的に示したり、主な活動の流れを示したりして、単元全体が概観できるようにする。

また、一時間の授業に学習の段階や過程があるように、単元全体においても同様である。したがって、単元内における学習のまとめりやその順序（1次、2次）、学習に必要な時間数などが示されることが望ましい。

5 指導上の留意点

- ・幼児児童生徒の興味関心、障害の程度や状況との関連や留意点
- ・単元全体にわたる危険防止・安全についての配慮

この単元の学習を進めるに当たって、障害の程度や心身の状況等で特に留意する必要がある点を端的に示し、どのような指導の手だてを講じるかを具体的に示す。また、単元全体にわたる危険防止・安全についての配慮を必ず示す。

6 本時の指導計画（本時案）

全体計画（集団で活動する場合）

主 眼：学習集団としてのねらい
本時の位置：本単元、題材の全時間の第何時に当たるか
前時の活動や意欲の高まり
次時への発展の予想
指導上の留意点：本時で特に留意する必要がある点
展 開：学習の流れ〔導入→展開→まとめ〕
全体やグループの動き（個々の動きを書く場合も多い）
幼児児童生徒同士のかかわり
教師の支援
評価



個々の指導計画

主 眼：本時に達成したいその子のねらい
本時の位置：前時の活動や意欲の高まり
次時への発展の予想
指導上の留意点：本時で特に留意する必要がある点
展 開：学習の流れ〔導入→展開→まとめ〕
個別の教育課題，指導計画を視野に入れた学習の具体的な進め方

7 反 省

- ・主眼に対しての幼児児童生徒の活動の様子
- ・幼児児童生徒のねらいに対しての指導・支援の在り方

② 本時の指導計画（本時案）

ア 主 眼（ねらい）

主眼は、この時間の目標を簡潔に述べる。その際、どのような幼児児童生徒が・どのような場面で・どのような手だてにより・何を身に付けようとしているかということをも具体的な姿ではっきりと記述する。また、一人ずつねらいを設定するようにしたい。

本時の指導は、単元活動の大きな流れの中の1時間であるから、その流れの中でどう位置付けているかを明らかにした上で主眼を決めだす。繰り返しの多い学習であっても、幼児児童生徒一人一人にとっては、新たな意欲が育つ1時間でなくてはならない。そこで、前時での幼児児童生徒の姿の見届けを確実にし、本時のねらいを定めたい。

イ 本時の位置

本時の位置は、本単元・題材の全時間の第何時に当たるか、を示す。さらに具体化すれば、前時からの活動のつながりで意欲の高まりが分かり、それが本時を通して次時にどのように発展していきそうか、その予測の上で本時はどのような位置にあるか、ということを確認にする。

ウ 指導上の留意点

障害特性に関わる配慮点、危険防止・安全についての配慮点について記述する。

エ 展 開

「導入→展開→まとめ」という流れで展開する。次のような点に配慮していきたい。

導 入	知的な理解から入るよりも、身体活動を伴った積極的な活動が得やすいものから入るようにしたい。つまり、願う方向に幼児児童生徒の意欲を向けることが要求されるため「今日は、〇〇やろうね」というような言葉のみでなく、前時とのつながりから、本時の活動の取りかかりがつかめ、幼児児童生徒が、本時の学習に対して具体的なイメージや目当てをもって意欲的に取り組むことができるような導入の仕方を心がけたい。
展 開	幼児児童生徒が目当てをもって、主体的・意欲的に進めていく学習を心がけたい。この姿を引き出すためには、「何を」「どのように」学ぶのかということ計画しておかなくてはならない。「何を」とは、幼児児童生徒の個々に合った教材であり、「どのように」とは、学習の進め方（グループ、場、教師の支援など）である。これらの学習内容はその時の幼児児童生徒の課題に迫るものとして、支援と評価を筋立てて考えておくことが大切である。
まとめ	幼児児童生徒のできた喜びや満足感を確かなものとし、次時への意欲を盛り上げることをねらいとする段階である。そのためには、幼児児童生徒個々のその時間の意欲的・創造的な取り組みを集団の中で認め合い、全員で求めてきた目当ての到達度を具体的な活動を通して確かめ合うことを大事にしたい。1時間ごとのけじめあるまとめの意味においても、片付けの活動はその時間の中でできるようにしたい。

このように、一時間の活動の予測と展望を踏まえ、学習活動がより効果的に行われるようにするための具体的な指導・支援と時間配分を加えたものが展開である。項目としては、段階、学習活動、予想される幼児児童生徒の反応と支援、評価、時間（分）、備考欄が通常使われている。

オ 反 省

本時の指導の反省は、次時の指導の見通しを立てるため、ただちに行うことが必要である。反省の観点として、

- ねらいに対して、幼児児童生徒の様子はどうであったか。
・育ったところ ・つまずき ・困難点 など
- 幼児児童生徒のねらいに対しての指導・支援の在り方はどうであったか。
・教師の出 ・T Tの在り方 ・教材研究

などが考えられ、これらの内容の検討の上に立って、次時の指導計画を幼児児童生徒の実態によく合うように吟味・検討し、作成していくようにする。

カ 教材研究

学習を通して幼児児童生徒が成就感や満足感を持つことが大切である。そのため、教師は、十分な教材研究を行い、一人一人に合った活動を用意すること、補助具や工程表を用意しておくなどして環境を整えることが必要になる。指示で動く子どもにするのではなく、幼児児童生徒が、自らの力で成し遂げた満足感を味わうことにより、自信を育てていきたい。

本時の指導計画（本時案）の形式〈例〉※全体計画（集団で活動する場合）

- 1 主 眼 どのような子どもたちが、どういう場面で、どのような手だてにより、何を身に付けるか ※個々の主眼を表記してもよい。
- 2 本時の位置 （全○時間中第○時）
前時の活動の様子や意欲の高まり
次時への発展の予想
- 3 指導上の留意点
- 4 展 開

段階	学習活動	予想される幼児児童生徒の反応（○）と支援（△）評価（☆）	時間	備考
導入／展開／まとめ	活動の流れを端的に記入する	予想される子どもの反応や教師の指導・支援、評価の観点 を具体的に表す。 A児 ○ 予想される反応 △ 教師の指導・支援 ☆評価 B児 ○ 予想される反応 △ 教師の指導・支援 ☆評価		使用する教材教具等を記入する
		* 一人一人の子どもについて記入欄を作成し、「予想される反応」と「教師の指導・支援、評価」を符号等で区分すると分かりやすい。 * 必要によっては、全体計画と同形式の本時案を一人一人の子どもについて別紙で作成する。		

5 反 省